

した。今でも尊敬しています」と感謝の気持ちを伝えます。

鳥木さんは看護学生の時、自身の看護師としての根底となる、ある体験をしました。2年目の実習時、認知症の患者をはじめて受け持ちましたが、接し方が分からず、全くコミュニケーションが取れませんでした。しかし、指導教員がその患者に接した時、その患者は笑顔になり、別人のようにさまざまなことを話してくれました。その姿に鳥木さんはショックを受けました。「患者さんが自分らしく生活できるようにサポートしていくためにもたくさんの方の学びながら、自分の看護観をしっかり持って看護に取り組んでいこうと強く思いました」。

齊藤さんは、1年目に最初に看



鳥木さんを支える3階病棟の仲間とともに。

チャレンジ精神を胸に日々研鑽する鳥木さん。趣味は登山、キャンプとアウトドア派。



ます。絶飲食の状態でしたが、「スイカを食べたい」という患者の「最期の願い」を叶えるため皆で話し合いました。そこで家族にスイカの汁を持ってきてもらい、患者の口にくくめたところ、患者はすこく喜びました。そして、翌日の朝に亡くなりました。「患者さんの最期の思いを受け入れ、今何が最善かを考え実践した先輩たちの姿を見て、これが看護の本質だと実感しました」。

それぞれが目指すこと―「患者さんと向き合う」、「経験を重ね学び続ける」、「積極的な後輩支援」

山中さんは、こだわりが強く怒ってばかりいた患者に対し、少し及び腰になり、きちんと向き合えていない時間が続きました。しかし、気持ちを切り替え怒られても逃げずに自分から出向いて話を聴くことを心がけ、患者の考え、思いを察して先に行動することを

地道に取り組んでいきました。するとある日、その患者から「あなたが担当でよかった」と言われました。「忙しい中でも何を優先するかを考え実践することで、患者さんも心を開いてくれると感じました。あの一言は本当に嬉しかったです」。

リーダー業務を担ってから山中さんは、以前に比べ少し周囲を見渡せるようになったと感じています。医師の指示の根拠をより理解するための勉強も欠かさない毎日です。また、看護を深めるにつれ、「人に伝える難しさ」も実感しており、個に合わせた伝え方を変えるなど工夫して取り組んでいます。入職以来、不安なことも多かった齊藤さんは、迷いながらも慎重に一步一步前進し、看護師としての経験知を高めてきました。3年目に入り、患者・家族が「何を求めているのかを考えながら関わる余裕が少なくてきた」と感じており、リーダー業務やプリセプターなどの役割を担いながら日々、自身の看護を深めています。

鳥木さんは3年目に入り、「自分がどうしたいのか」ということをより明確に認識できるようになったと感じています。認識が明

確になったことで、自ら積極的に発信するようにもなりました。「これもプリセプターの先輩のおかげですし、私自身も新人や後輩にそうした支援を行っていきたいと思っています」。

同病院でさまざまな人たちに助けられながら成長している3人ですが、鳥木さんは今後、看護師として自身を高められることは何でも挑戦したいと考えています。「いろいろなフィールドを経験することで、自分のモチベーションも維持しながら、よりよい看護を追求していきたいです」。

齊藤さんは、呼吸器内科・外科病棟の看護師として、肺だけではなく関連する心臓や脳など全身的なアセスメント力を深めていきたいと考えています。また、今後、後輩と夜勤を担うケースも想定されることから、「急変時などで適切な指示、行動がとれるよう経験を重ねていきたいです」と話します。

山中さんも急変時の対応などにまだまだ不安を抱えていることから、「もっと経験を積み重ねることが必要」と考えているほか、終末期ケアについても学びを深め、自身の看護の幅を広げていくことを展望しています。